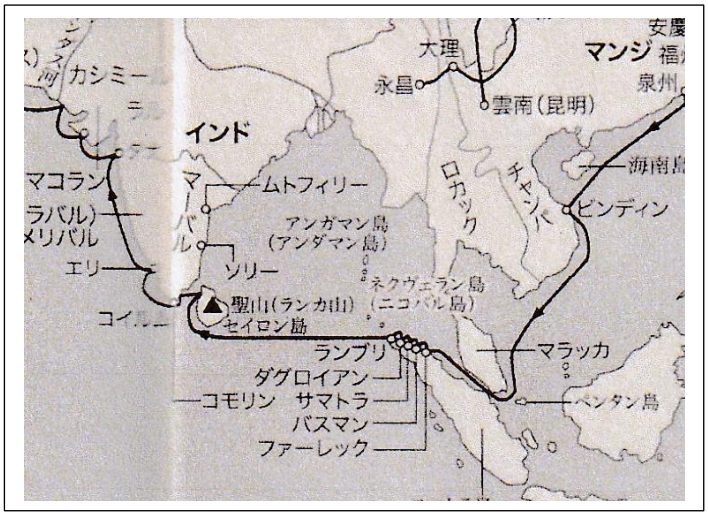
マルコ・ポーロ　東方見聞録　　6

プロローグ　帰国の途

八柳　修之

マルコは父ニコロ・ポーロらに連れられ、フビライ・ハーンの下に来て以来、大ハーンの使者として各地に派遣された。有能なマルコは、旅で見聞した珍しい話、面白い出来事を要領よく興味深く報告し、大ハーンに気に入られ寵愛されること 17 年間の月日が過ぎた。やがて、故郷に帰りたいという気持ちが高まり、幾度となくお暇を願ったが、大ハーンはなかなか許さなかった。　ところが、ペルシアの国王からアルゴンの王妃が亡くなり、その遺言で自分のあとを継ぐ者は王妃の一族を選んで欲しいとの報が使者によって大ハーンにもたらされた。大ハーンは喜んで、王妃一族から美人のコチカン姫（17 歳）を選んだ。使者は同意しコチカン姫を連れて陸路帰国の途に着いた。ところが、8 ヶ月後、途中、戦争のため進めなくなったと戻って来た。

アラゴンの使者はニコロ，マッテオ、マルコら 3 人は有能な人と知っていたので、3 人を同行させてほしいと大ハーンに申し出た。(あらかじめ、マルコ等が仕組んだ)。大ハーンはやむを得ず戻って来ることを条件に認めた。今回は陸路を断念し海路をとることになった。また、大ハーンはコチカン姫のほかマンジの王女等 2 人も同行させることにした。出発に際し、大ハーンはマルコら 3 人に金牌を下賜し、大ハーンの領土内はすべて自由に旅行できること、3 人と同行者の食料を供給するべき旨命じた。また 3 人にローマ教皇、フランス王、スペイン王、その他キリスト教国の諸王宛て手紙を託した。そしてなんと大ハーンが用意させた船は 14 隻、いずれも 4 本マストで 12 の帆を張ることができた。これらの船の中には水夫 250 人～260 人が乗り込む巨船が 4 ～5 隻も混じっていた。船は大ハーンの命令で 2 年分の糧食が積み込んであった。マルコは中国の造船技術は素晴らしいものであると述べている。



こうして、マルコら一行が泉州港を出発したのは、1290 年末と見られている。**泉州港**を出発してから 2,400 km、ケイナン（不詳）という大きな湾を横切って**チャンバ（現在のベトナム）**いう非常に豊かな国へ着いた。チャンバの国王は毎年，象 20 頭と沈香を大ハーンに貢物として献上していた。チャンバの国王は王子王女含めて、326 人の子供がおり、そのうち 150 人以上の王子は軍人になっていたという。ついでタイ湾を横切り、マレー半島のロカッタに着き、そこから海岸沿いを南下して、現在の**スマトラ島**に着いた。この島には八つの王国があった。

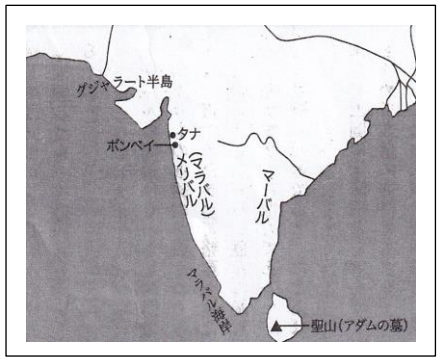
マルコ達がここに着いたとき北東の風が吹き荒れ、風向きが変わるまで 5 か月も滞在した。その後、240 kmほど北の**ニコバル島**（裸族が住む）を経て、西へ 160 km航海すると**アンダマン島**に着いた。国王はおらず住民は仲間でないと人を喰い野獣のような生活をしていた。

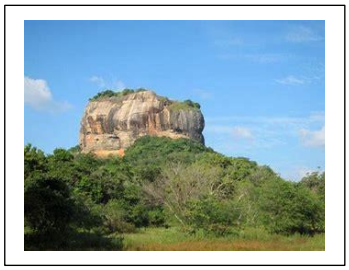
ニコバル島（写真：左）

インド洋ベンガル湾に浮かぶ 22 の島々からなる諸島。1944 年、日本軍が統治したことがある。

アンダマン諸島（写真：右）

ベンガル湾に浮かぶ大小 302 の島々から散らなる。インド・ミャンマーに属し、人口、34 万人。1944 年、日本軍が統治したことがある。

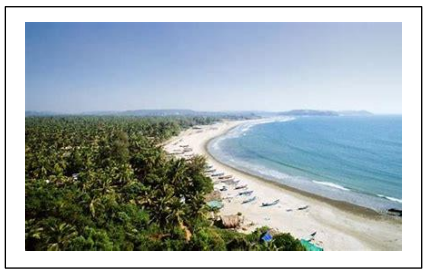




アダムスピーク山(2238m)　頂上にお釈迦さまのお墓がある。

アンダマン島から西南西に約 1600 ㎞航海し**セイロン島**に着いた。セイロンは大きな島であり、非常に険しく高い山、聖山があり、イスラム人はアダムの墓、仏教徒は釈迦の墓があるという。

セイロン島からさらに西方約 100 ㎞の**大マーバル**（現在のインド東南海岸地方）に着いた。この地方では美しい真珠が沢山採れた。大部分が世界中に運ばれ、国王の収入の主な部分となっている。また国王は 500 人の妃と同数の妾を持っている。

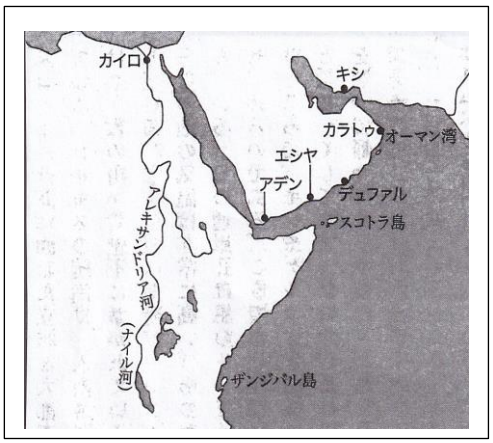


東南海岸

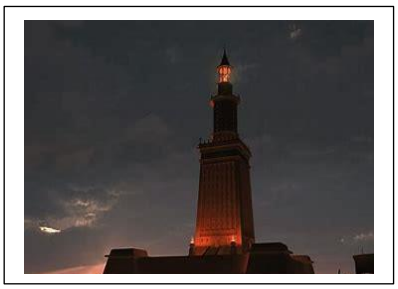
コモリン岬

ラル地方　マーケット

さてマルコやコカチン姫を乗せた船団は、やがて**マーバル地方**を出発し、インドの南端にある**コモリン岬**を回り西南海岸の**メリバル**（マラバル海岸）王国に至った。メリバルの海賊は動作が素早く性質が荒々しい。商船を見つけると寄ってたかって略奪をする。マラバル海岸地方は産物が多く東西の商船が集まって来るからであった。次いでバラマン教徒の発祥地**ラル地方**に着いた。バラマン教徒は肉を食べず、酒も飲まず、質素な生活を送っていた。さらに先グジャラート半島にはゴズラート王国があり、胡椒・ショウガ・藍がたくさん産出していた。マルコはアラビアやアフリカの船乗りから、各地のいろいろな面白い話を聞いた。インド洋のどこかに男島と女島があり、男女別々に住んでいる。男たちは 3 月から 5 月まで 48 ㎞離れた女島へ行き、3 カ月間、妻と暮らす。男の子が生れると 12 歳まで母親と暮らす。彼らが一年中妻と暮らさないのは、長生きできないからという。男島と女島、スコトラ島のクジラ捕りの話，マダガスカルやザンジバルの話、面白い伝聞の話があるが割愛する。ついでマルコは旅の最後のコース、ペルシア湾に入る前にアラビア半島南部のアデンの話をしている。



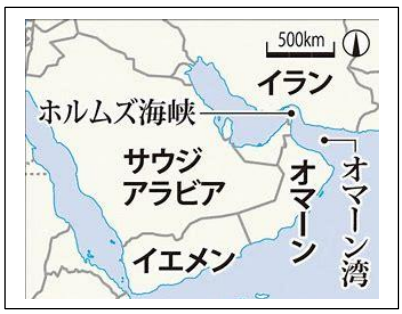
16 世紀の**アデン**と下現在



アレキサンドリアの灯台

アデンは古代からエジプトとインド貿易の重要な中継地基地である。この時代のインド貿易はアラビア馬であった。インドの商人たちはこの海港で商品を小船に積み替え，およそ一週間もかかって河を遡って行き積み荷を降ろし、今度はラクダの背に乗せて、さらに陸路を 30 日もかかって奥地へ進む。30 日の行程後、ナイル河と呼ば

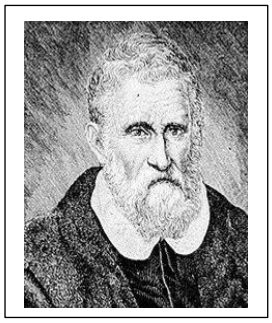
れるアレキサンドリア河へ着く。そこで積み荷は、さらに小船に積み替えられ川を遡ってカイロに運ばれる。さらに運河によってアレキサンドリアへ送られるのである。このようにして、アレキサンドリアの人たちは、アデン経由で胡椒や香料、その他貴重品を手に入れるのである。



さて、マルコら一行の船はペルシア湾に近づき、その手前のオーマン湾に**カラトゥ**という町に着いた。大都市であった。ここから北北西に 480 km進と**コスモス**市、ここからいよいよ陸路，イル・ハーン国の都、**タブリーズ**に向かうである。マルコ等一行は、スマトラを出てから 18 か月、熱帯の暑い海を渡り、海賊の魔の手から逃れ 1293 年 2 月頃、ホルムズ港に着いたのである。生き残ったのはマルコたちのほか水夫 18 人、アラゴン王の重臣 3 人のうち 1 人、あとはコカチン姫とマンジ王の姫だけだった。泉州を出発した船は 14 隻のうち、おそらく 1～2 隻と見られる。　一行は 22 年前の通った山賊の多いレオパールの荒れ野を通り，イル・ハーン国の都タブリーズに着いた。

タブリーズ　世界最大のバザール

早速、宮殿を訪れたが、元朝に使節を送ったアラゴン王はすでに 1219 年に亡くなっていた。そこで、後を継いだ皇太子のいるアルブル・ソルまで行き姫を届けた。皇太子、今はキアトゥ王、モンゴル人の習慣に従って自分の妻にすることにした。マルコ達は、タブリーズに 9 か月滞在した後、懐かしのヴェネツィアに向かった。王は別れに際しマルコ等に金牌を与えたが、いずれも長さが 50 ㎝、幅は 10 ㎝ほど、重さは 2 キロ近くもあった。ヴェネツィアに着くまで色々トラブルがあったが割愛する。そしてマルコ等がヴェネツィアに着いたのは、1295 年のことであった。



マルコ等は我が家に戻ったが、全く知らぬ人が住んでいた。無理もない、もう 25 年もたっていた。異国での生活と苦しい旅は、3 人の顔をすっかり変えてしまっていたのだった。あの若々し 17 歳のマルコは、今はもう 42 歳にニコロとマッテオは、すっかり老人になっていた。マルコが帰国後どのように暮らしたか調査はあるものの不明な部分は多いと長沢は述べているが、あまりハッピーではなかたようだ。(完)

2001 年 5 月、イタリア観光旅行でヴェニスへ行ったとき、サンマルコ広場から歩いて数分の所に狭い運河があり、マルコ・ポーロが住んだ家を案内されたが、標識があるだけだった。写真は他人が写したもの。この旅行で、偶然、FWA の西村さん親子と一緒になった。小百合さん、元気ですか。お母さんは元気にウォーキングを続けていますよ。

今年、私は 86 歳、断捨離中のところ、村川堅太郎・江上波夫・林健太郎、編纂の娘が使った「世界史」の教科書が出て来た。懐かしさもありむさぶり読んだ。フビライ・ハーンが世界史を動かし、マルコ・ポーロの「東風見聞録」が、新大陸の発見、世界航路の達成につながっていった。マルコ・ポーロ以前にも多くの商人達が西域・中国を訪れているが記録に残した人は、本欄で取り上げたイブン・パットウォーター以外稀有である。
翻って歩いた記録を残し発表した人は少ない。寅散歩 500 回の平野武宏さん、関東自然歩道記の池内淑皓さんの記録は賞賛すべきものである。　　以上　完